



日向耳川流域の木造建築と文化

幕末の診療所 牧水を育んだ木造家屋

東郷 若山牧水生家

□保存修理の意味

若山牧水生家を何故保存しなければならないのか。その第一の理由は牧水が生まれて、育ち、少年時代を過ごしたという歴史的価値である（昭和 41 年 9 月県文化財指定）。それは生家という建造物だけの指定ではなく、牧水の生活した場（遊んだ庭も、手を洗った井戸、米を突いた唐臼など）も指定の範囲である。文化財指定の分類では記念物であり、種別では史跡である。つまり生家が立っている土地と密接につながっていて、価値を有するものである。第二の理由は多くの人々に知られている歌人としての価値である。その代表作が刻まれた歌碑は戦後間もなく（昭和 22 年 7 月）牧水郷土歌碑建設会によって完成し、生家が県指定文化財になる時に、歌碑の方は町指定文化財になり、その後、県指定文化財（昭和 53 年 1 月）になった。したがって、歌碑を含めて生家は多くの人々に親しまれており、これは文化的価値を有すといえるだろう。最後は祖父健海が医院兼住居として 1854（弘化 2）年頃建てた建造物としての建築的価値である。当時の医者はどんな部屋で診察し、待合室はどうであったか。それと家族の生活の場はどう関わっていたかなどを調査することで、病院建築の特徴を明らかにできる。

□牧水生家の建築的特徴

- 1) 三方を山に囲われ台風時の風避けが出来る配置である
 - 2) 川の屈曲点に位置し、景色、涼風を享受できる地である
 - 3) 主屋と付属屋が分散しており、山村型住戸配置と言える
 - 4) 横一列に並ぶ平面型であり、椎葉の一系列型住居（竿家）との類似性がある
 - 5) 建設当時としては珍しい 2 階屋であり、2 階軒高は美々津町家とほぼ同じ高さである
 - 6) 1 階の部屋の天井の高さが今日に比べると著しく低い
 - 7) 2 階のざしきと居間は冠婚葬祭にも使われた接客の場であり、開放的設えになっている。
 - 8) 軒までの構造は町家の形式で、小屋組では又首を使うなど一部山村型形式も見受けられる
 - 9) 平面に医家住居として次のような特徴がある。診療室（四畳）を中心に間取りが構成され、その配置は求心的で縁側がなく庭と連続している。待合室と診療室は間取りから、はっきりとした空間分離があったことを示す。
- これらの特徴が互に重なりあい、牧水生家を価値（歴史的価値、文化的価値、建築的価値）あるものにしている。



□ 2 階西のざしきを居間より見る：一階と相違して二階のざしきには竿縁天井が設けられ、格式がある。その天井は水平ではなく、小屋組みの制限を受けて三段になり、中央の天井が一番高く、床の間の天井がやや低く、南端の天井は斜めになっている。



□ 2 階西のざしき：二階ざしきの天井を高くするために欄間に小屋組みの斜め梁が露出され、欄間もそれに応じて斜めになり、二階の天井の未発達ともいえる時代的な特徴を現わし、小屋組みに応じて天井や欄間の納め方に知恵が見られる。

□ 牧水生家主屋全景：左がセンダンの大木、右が見事に咲く山桜、いずれも生家が創建以来のもの。写真は改修工事を終えて間もない光景である。



□牧水生家を知るためのキーワード

建物と周囲の山、川の関係
主屋の開放性
医家の特徴
当時の天井の高さの体感
階段の勾配
診察室の位置や光の状態
1 階に吹く風
2 階からの眺め
2 階の天井の形状
小屋組の組み方、棟と梁の大きさ
井戸を中心とする外部空間の求心性
裏手の建物と石積みの関係

牧水生家を訪れた際には、建物の配置、周囲の環境、日当たり、当時の医家の特徴、診察室、高さ、寸法、構造などを意識することで、建物はより多くのことを語ってくれる。そして、牧水の歌を2、3 首空んじれば、心はもっと豊かになるはずだ。



□山裾に花びらを散らしたように咲く坪谷の山桜
環境もあわせて文学遺産であることを感じさせる風景である。
「とほ山の峰越の雲のかがやくや 峰のこなたの山ざくら花」
この歌が身体感覚として認識できる風景が、当然ではあるが坪谷には
当たり前にある。受け継がれる風景の「尊さ」を感じるシーンである。

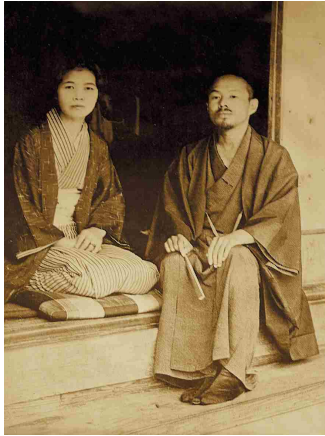
□牧水生家の保存と整備について

補修の上に補修を重ねた牧水生家を復元改修するため、平成 13 年に建築的な調査が鹿児島大学建築学科建築史研究室により行われた。その結果をもとに平成 15 年、全面的な復元改修工事がおこなわれた。この工事の際、明治 18（1885）年の棟札を発見したということも聞くが正式な記録にないので、建立は同報告書の通り 1854 年とする。150 余年の時間を経た建物ということになる。現在、敷地内には生家・馬屋・井戸・便所それに石碑類がある。石碑、便所（来訪者用のもの）を除く建物が復元改修され当時の姿がよみがえっている。敷地廻りは、北側の山の斜面が切り土のままの危険な状態であることから、排水溝を設け余裕を持った空き地をとった上で、化粧石積みの擁壁がつくられ、ドライな環境となっている。南道路側の苔蒸した石積みは当時のままで、敷地の入り口にある 2 本の大木とあわせて良好な歴史的環境をつくっている。

□牧水年譜

牧水の祖父、若山健海（武蔵国秩父出身）が長崎で医術修行を終え、開業の地を検討した時、日向行きを勧める友人の影響があり、美々津や細島での開業を考えるが、友人が近くで暮らす坪谷で開業を決める。
1836（天保 7）年 祖父健海、坪谷村に医院を開く
1845（弘化 2）年 祖父健海、木造瓦葺き 2 階建てを建てる
1885（明治 18）年 牧水生まれる
1890（明治 23）年 一家、西郷村へ転居（この間 6 年住む）
1892（明治 25）年 ふたたび戻る
1896（明治 29）年 坪谷小学校卒業（この間 5 年住む）
延岡高等学校入学
1899（明治 22）年 延岡中学入学
1904（明治 37）年 早稲田大学予科へ入学
この間、1905 年、1906 年、1907 年と帰郷
1912（明治 45）年 /1913（大 2）年 帰郷（この間 2 年住む）
この間 1924 年、1927 年帰郷
1928（昭和 3）年死亡、享年 43 歳

以上のように、この家は牧水が生まれた家というだけではなく、ここで育ち（幼少の頃 11 年間）、上京後も幾度となく帰省し、すごした住居である。歌人若山牧水が生まれ育った家であり、史跡としての価値に加えて、江戸末期、祖父健海が地域医療に取り組んだ医院建築としての価値がある。



□牧水と妻、喜志子：居間の庭先にて（大正 2 年頃）

□旅と「あくがれ」

牧水文学の最も重要なキーワードは「あくがれ」である。「あくがれ」の語源は「在処離れ」であり、「心身が何かに引かれ、もともと居るべき処を離れてさまよう意味」である。牧水は言葉本来の意味の「あくがれ」を生きようとした人である。その「あくがれ」を生み出した大きな要因は幼少期からの他国者意識である。牧水は故郷の坪谷を深く愛しつつ、他郷を求めたのである。このアンビバレンツこそ牧水の特徴であり本質である。

「けふもまたこころの鐘をうち鳴し

うち鳴しつつあくがれてゆく」

「幾山河越えさり行かば寂しさの

終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」

□牧水の「旅」感

『私は常に思っている。人生は旅である。我等は忽然として無窮より生まれ、忽然として無窮のおくに往ってしまう。その間の一步一步の歩みは、実にその時の一步一步々で、一度往いては再びかえらない。私は私の歌をもって、私の旅のその一步一步々のひびきであると思いなしている。言いかえれば、私の歌はその時々、私の命の碎片である。』（第二歌集「独り歌へる」自序より）

□『濡草鞋党』

牧水は自分の家を『濡草鞋党』と言っている。『濡草鞋を脱ぐ』という言葉が私の地方にある。他国者が其処に来た初めにある家を頼って行く、それを誰は誰の家で濡草鞋を脱いだというのである。その濡草鞋をぬいだ群が私の家には極めて多かった。』（「おもいで」の記）の『濡草鞋』より）『濡草鞋党』、牧水を理解する上での重要な意識である。



『一度往いては再びかえらない。』
人生の道もまた耳川の流れと同じように「不可逆」である。



□1 階東の縁側からおもてを見る。左手が 4 帖の診察室。天井高 2050 ミリ弱、小梁下 1920 ミリ、大梁下 1750 ミリで天井の低い空間である。



□診察室室から庭を見る。縁をつくらず、直接外部に面するので日が差し込み明るい部屋である。



□1 階西のかまや。手前に三連の釜、いろり付き 3 畳の居間。主屋の建築の後に増築されたものである。小屋組をあらわしとしている。

□南の庭を西のから見る。手前に診察室の障子がある。垂木と桁の間は面戸を入れず外部とつながっている。



□北側斜面との関係。もともとは法の斜面がそのまま見えた場所もあったが石積みで施されてオリジナルより明るくなった。

□1 階西のかまやを外から見る。切り妻の主屋に下屋の庇を廻している。かまどの煙出しの小屋根が棟の上に見える。主屋は母屋が漆喰で固められているが、増築部の妻壁は和小屋をおもてに見せいる。



□宮崎県：耳川流域の代表的な木造建築物

本事業は耳川流域で保存状態のよい木造建築をその地域の文化とあわせて紹介するものである。そのうち、椎葉・十根川集落、南郷・西の正倉院、東郷・若山牧水生家、日向・美々津集落、日向市駅の 5 つを特に選び、パンフレットをつくり紹介する。

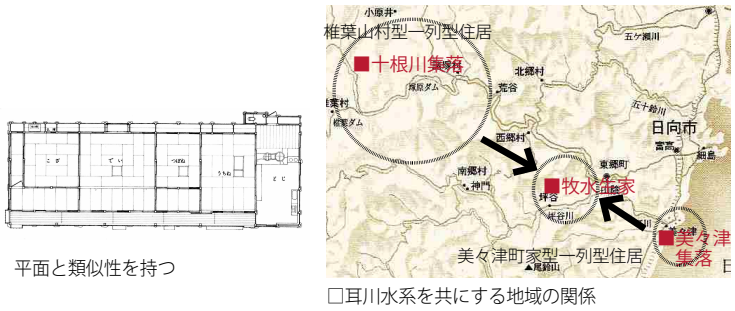


参考資料 □美しい日本の民家（川島宙次著）□若山牧水生家調査報告書（調査：鹿児島大学工学部建築学科建築史研究室）、□日向の歴史と文化（早稲田大学日本地域文化研究所編：若山牧水と日向／伊藤一彦著）、□家族の数だけ歴史がある（日向市編）、他

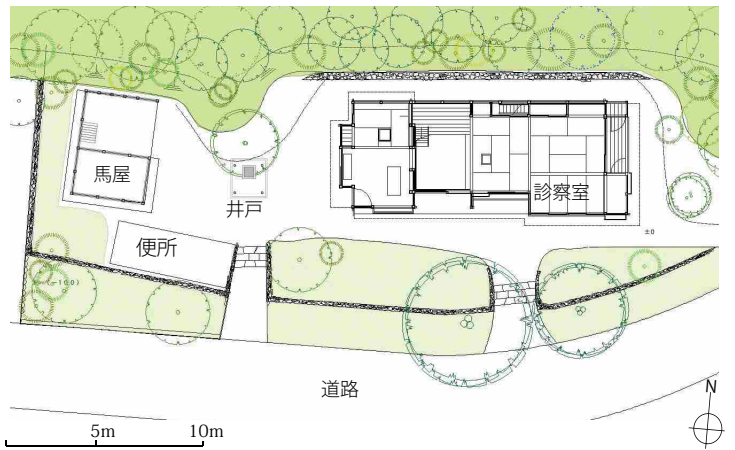
□このパンフレットは日本商工会議所の補助事業「地域資源∞全国展開プロジェクト」で、日向商工会議所が推進する「木造建造物産業観光等プロジェクト」の一環でつくられたものである。 © 日向商工会議所 制作：川村宣元建築設計事務所 2012.1（2）

□椎葉－坪谷－美々津：平面型の類似性

坪谷の地は九州山岳地帯の入口に位置する。平地は優先して耕作地に当てるため、住居の敷地は山沿いに当てることになる。敷地は山の斜面を造成してつくるため、奥行きをとることが難しい。そこで住居は一列に部屋が並び、山側に収納やトコを持つ椎葉の並列住居と同じ系列の平面型を形成する。牧水生家は椎葉の一列型住居のように極端なものではないが、山村住居の特徴を持つものと言える。ちなみに、美々津の町家も奥行き方向に一列型を形成するが、敷地の間口制限という社会的な制約によるもので、山村住居の自然的制約と区別しなければならない。



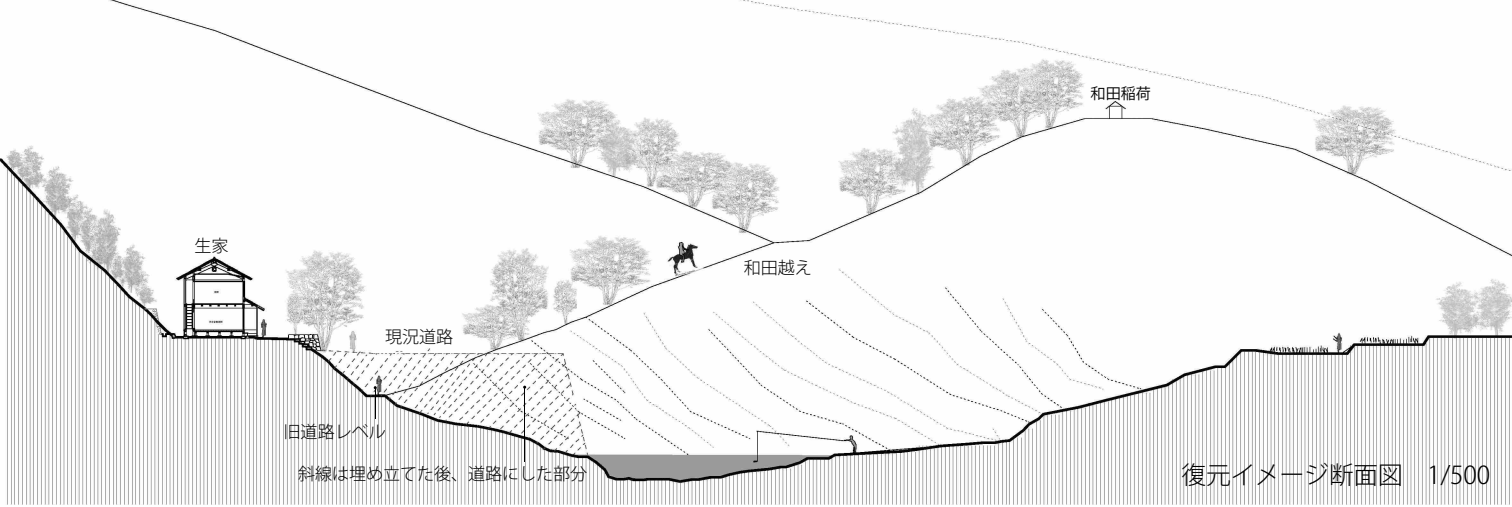
配置環境特性



□配置図：牧水生家敷地のすぐ前に道路が通り、道路の端はすぐに坪谷川の河川敷へと傾斜していた。

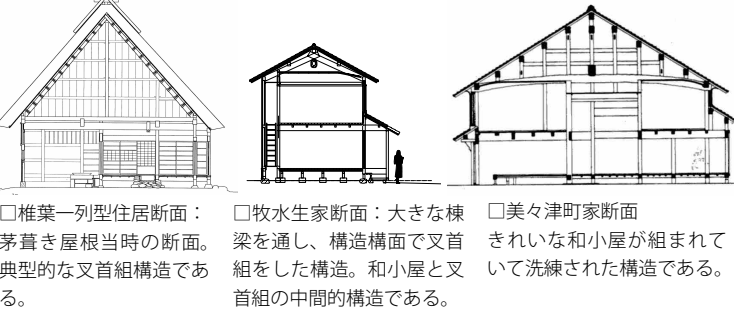
「ふるさとの日向の山の荒溪の流清うして鮎多く棲みき」
「黒松」、『鮎釣りの思い出』から

□造成断面：坪谷川は牧水生家で東で山肌にぶつかり、道をつくる余地を残さなかった。もともとの街道は「和田越え」といって和田稲荷のある小さな尾根の斜面を登り北東に抜けていた。また、生家背後の斜面は元々、山地を切ったままの状態、もう少し建物の北側に迫っていた。平成14年の復元工事で石積み擁壁工事や排水工事を施し現在の姿になった。



□椎葉－坪谷－美々津：小屋組から見る断面型の類似性

椎葉においてはプリミティブな又首組構造（合掌構造）による茅葺き屋根が主体であり、美々津の町家は和小屋構造による瓦葺きである。両者の中間地のある牧水生家では、その両者の特徴を併せ持つ構造と言える。大きな棟梁を通し、この上に又首を架け渡し、母屋をかける。又首は両妻側、間仕切り梁などの構造構面に設置している。又首は棟梁に斜めに架け渡ししているので又首組構造のようにスラスト（梁間方向、外に開く力）は働かない。規模の小さい馬屋でも用いられていることから、この時代（幕末期）の瓦葺きの標準構法（富裕階級おいて）であることが想像できる。



□椎葉一列型住居断面：茅葺き屋根当時の断面。典型的な又首組構造である。
□牧水生家断面：大きな棟梁を通し、構造構面で又首組をした構造。和小屋と又首組の中間的構造である。
□美々津町家断面：きれいな和小屋が組み立てられて洗練された構造である。

「晴れた日も悪くないが、私の家の眺望は雨の日が特にいい。」
「思い出の記」、『坪谷村』の一節から

□2階窓からの眺め：河川敷は埋め立てられても川への伏角は変わらない。窓から、川の流れることができる。

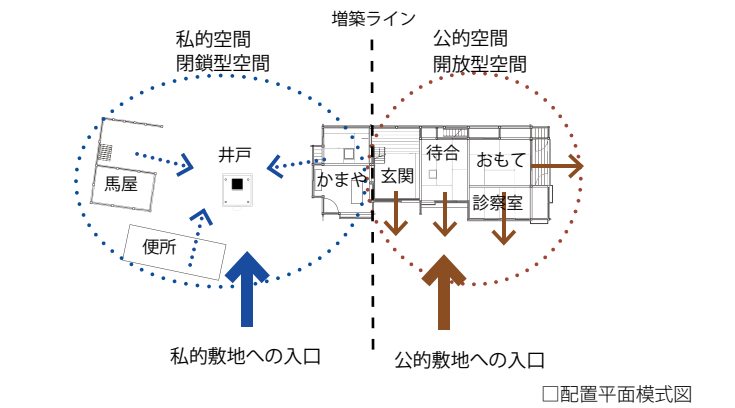


□牧水生家前の坪谷川大淵：川が山地にあたり大きく直角に流れをかわる部分に大きな淵があり、格好の水遊び場になった



□配置の空間構成

敷地西側には主屋のかまや、井戸、馬屋、便所があり井戸を中心とした日常的な私的空間であり、求心的な空間であり、閉鎖型空間であるということが言える。便所のすぐ東側には敷地への入口があり、私的空間の入り口となる。これに対して、敷地東側は接客空間であり、公的空間であると言える。主屋の玄関、患者の待合室を兼ねた居間、医療行為をおこなう診察室、そしておもてがある。玄関と待合室兼居間の正面には敷地への入り口があり、これが公的空間の入り口になる。このように牧水生家では私的空間と公的空間の分離がなされており、そのことは屋根の形状にも現れている。東側、公的空間では入母屋屋根であり、西側は切妻屋根である。



□井戸を中心とした私的な閉鎖空間。井戸の向こうに馬屋、左手に便所。手前が主屋のかまやである。

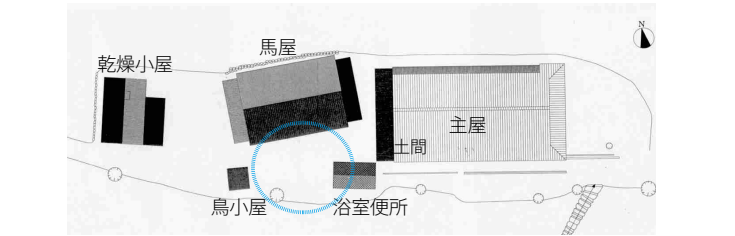
□坪谷川の民家の並び

この谷間は川を挟み南に開けた緩斜面を持ち、北向き斜面ではあるが南の山が緩傾斜であるため、比較的良好な条件の耕地を持つ。坪谷川はこの谷間の北側を大きく蛇行しながら流れる（図中、左から右へ）。この地域の幹線道路は坪谷川と北側の山との間につくられている。住居は北側の山と道路の狭い地域に、山裾に沿うように展開していることがわかる。ほとんどの住居が山を削り造成した土地につくられていて、日当りの良い地を少しでも多く耕地にしようとする意思が読み取れる配置である。



□椎葉山村型住戸配置との類似性

椎葉では、沢水を使っているので井戸のような求心施設は見受けられなが、主屋の西側の土間、馬屋、浴室、鳥小屋で囲われた空間に求心性が見受けられる。牧水生家は椎葉の分散型住戸配置に類似し、山村型との配置型と言える。



□山を背にした配置

山を背にした住戸の位置は、山崩れや出水の脅威にさらされていた。これに対応するように、住戸の山側では階段やタナ、トコといった構造材を二重に配置する構法を採用していたほか、山側の外壁は漆喰で固め、湿気が室内に入らないようにしていた（2階書斎北側の窓は改築によるもの）。



□西立面を見る。低い屋根が切妻の増築部。全体は切り妻であるが出入口は平入となっている。

枚水生家の3つの基本寸法モジュールがある。それは、1) 畳を敷いた部分、2) 畳を敷かない部分、3) 増築した部分の3つである。2階の「居間兼書斎」は当初は板張りであったので畳を敷かない部分として扱う。畳を敷いた部分は一間あたりの内法寸法を6.4尺として計画していた。畳を敷かない板張りの部分、1階「玄関」と2階「居間兼書斎」は、けたゆき桁行方向一間あたり6.3尺を基準としていたが、は梁間方向一間あたり内法寸法が6.0尺で、桁行方向のものに比して大きく異なっている。それは畳を敷いた部分と畳を敷かない部分が並列しているため、梁間方向は畳を敷いた部分の寸法が大きく影響しているからである。畳を敷いた部分は梁間方向の一間あたり内法寸法が6.4尺だが、背面のトコ、タナの幅は2.2尺であるためにその値も加わってくるからである。つまり、畳を敷く部屋の大きさを先に決め、それから1階の「玄関」、2階の「居間兼書斎」をつくっていったことが分かる。

増築した「かまや」は梁間方向の一間あたり内法寸法が約6.0尺であり、先に建設された畳を敷かない1階の「玄関」はそのまま、2階の「居間兼書斎」の大きさとなるため寸法が一致している。

山に沿う北面には開口部がないためか、この面のみ底を持たず、他の東、南、西三面に底を持つ。その底は東の一部と南の中段だけ縁側や玄関ポーチのような内外の中間領域のような空間になり、他の部分は内部空間になっている。一階のざしきの南東端は底から更に内側のざしきへ約1間入り、4畳の診察室になった。

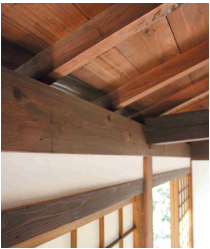
これは底の階下がほとんど縁側になる日本的な民家の特徴とは相違するものである。医院という機能を満たすため縁側のような曖昧な機能ではなく、目的を持つ空間に変化していったものと思われる。

□面戸について

かまやなどの炊事場は薪を使うので、天井に煙出しの小屋を設けている。薪を用いない炭囲炉裏や火鉢の場合は、部屋に目立つ煙出しは見当たらぬ。しかし、面戸（桁と垂木、野地板にあく隙間、これを塞ぐ板を面戸板と言う）をよく見るとふさがなくて、あいているのがわかる。椎葉においてもこれと同じ設置が見受けられる。

面戸部分

Architectural cross-section drawing of a traditional Japanese house (Makura no Uta). The drawing shows the roof structure, interior layout, and exterior walls. The roof is labeled "棟梁: 松丸太 末口280" and "又首梁 120x260". The interior spaces are labeled "居間" (Living Room) and "待合室兼居間" (Waiting Room/Living Room). The exterior walls are labeled "土間" (Earth floor) and "土間" (Earth floor). The drawing is titled "牧水生家断面図 1/100".



□面戸部分

牧水生家を医師の住まいとして捉えるとき、4 畳の「診察室」に特徴があると言える。「診察室」は 1 階の南東隅に位置し、南側の底部分を室内に取り込み、縁側を設けていない。「診察室」の南、東側は庭があり、光が直接入る空間となっている。それは医師が診察を行なう時には大変好ましいことである。「診察室」は庭に直面しているので緊急時に患者が直接に入ることが出来る。「4 帖」という狭さは、縁側を設けていないので閉鎖的で、内向的な空間であるので、患者が医師と一体となる空間を形成しているといえる。

当住宅には 1 階の「おもて」と 2 階の「ざしき」と 2 つのトコ・タナを構えた部屋があるが、2 階の「ざしき」は接客空間で、1 階の「おもて」は主人の居間兼仕事場であった。「おもて」は「診察室」あるいは玄關のある「待合室兼居間」と接しているのが、患者が訪れた際に外向くには最も都合のよい位置である。複数の患者の診察をおこなう場合はふすまを開いて「診察室」と「おもて」を一体的に使うこともできる。「おもて」に接した「縁側」も「産屋」として利用され、「診療室」を中心に各部屋が有機的な繋がりをしている。

若山牧水生家は縁側を設けていない「診察室」を持ちながら周囲に医師の住まいとしての特徴を有する極めて特殊な住まいと言える。

□診察室



二階建の採用と庇空間が縁側などより内部空間として使われることから、農家よりも町家の骨組みの特徴が現われている。二階建にするために一階ざしきの天井は低く、二階ざしきの天井を高くするために小屋組の合掌の下端が室内に露出することになった。このことは水平な天井を張るに至る過渡期の形態として評価できる。

そこで、美々津町家と牧水生家を比較すると、建物の桁高は牧水生家が4,800mm（16尺）、美々津町家は4,500mm（15尺）で、共に近い寸法であるが両者とも十分な高さとはいえない。

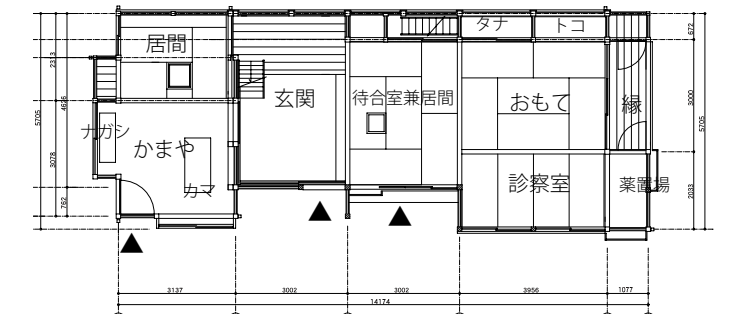
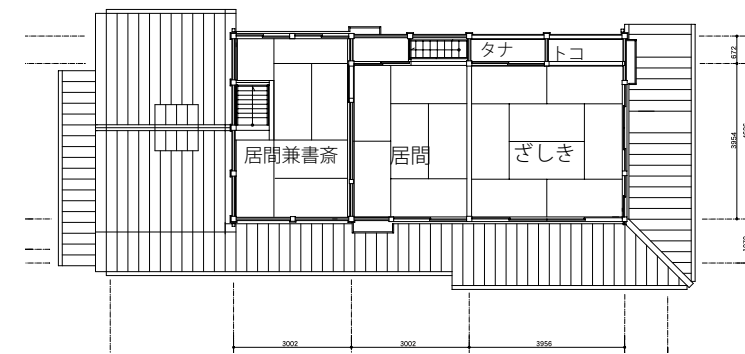
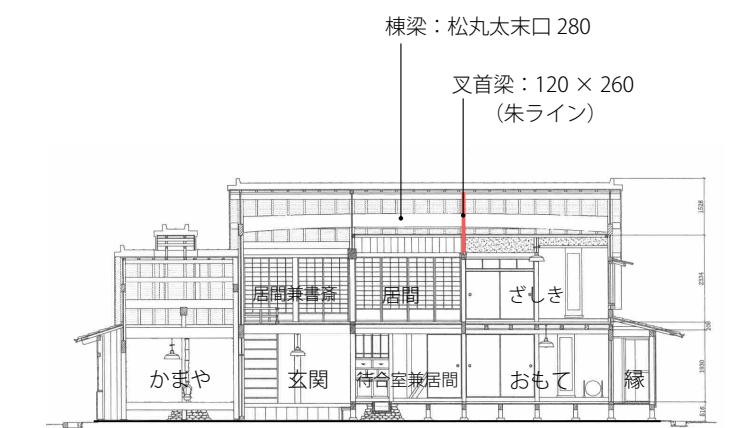
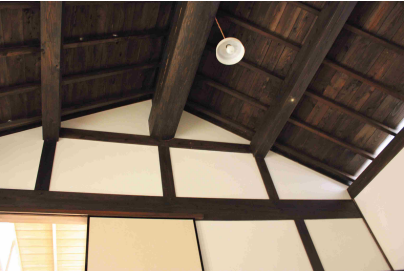
美々津町家の場合、1階は商売の場であるので階高を2,500mm程度とり、2階の桁高は床から1,600mm前後とし、屋根勾配に沿って天井を上げる舟底天井としている。

牧水生家では1階階高を2,100mm弱とし、天井高は2,050mm、梁下では1,750mmで梁に直接襖の溝を掘り、高さを稼いでいる。2階の桁高を床から2,150mmとし、更に小屋裏の空間を生かし、2,360mmの天井高を確保している。従って、牧水生家では日常の診療室よりも接客空間である2階のざしきに重きを見ていたことがわかる。

牧水生家が江戸時代末の1845年に建設され、当時、二階建住居はこのあたりでは珍しく、小屋組との関係でどのように二階家が造られたかを考えることは大変興味深い。

牧水生家は下図の桁方向断面図を見ると一階建部分に増築された平屋のかまや（台所）がある。二階部分の居間兼書斎に天井がなく、居間、座敷には天井がある。その三箇所的小屋組みの高さはそれぞれ異なる。かまや（台所）の小屋組みの高さは桁から2,120mmであり、居間兼書斎の小屋組みの高さは桁から1,880mmあるが、座敷の部屋の小屋組みの高さは天井から1,200mmである。かまや（台所）の小屋組はあらわしであるので問題ないが、二階ざしきでは小屋組内の空間を有効に使うことで天井の高さを確保している。これは大きな棟梁を桁行方向に通すことで小屋裏の中をすっきりとさせ、天井高を確保する工夫をしていることがわかる。

□大きな梁：2階居間件書斎よりみる

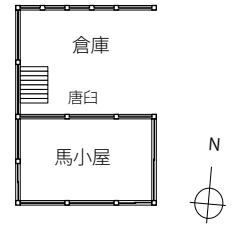


牧水生家の馬屋は主屋の西側、敷地の西端に位置する。この位置は主に私的な日常生活の空間となる部分の端部である。一般に農家の馬屋は納屋、馬の通路兼堆肥置き場、馬の部屋である馬舎、そして農機具や薪を置く下屋等で構成される。農家ではない牧水生家の馬屋は馬舎と納屋の二重で構成される。この馬舎は医師であった牧水の祖父と父が往診の際に使用する馬を飼う場所であった。北側の納屋には唐臼からうすが設置してある。馬舎北側、即ち納屋部分の小屋組は和小屋組だが、中央部と南側、即ち馬舎部分の小屋組は又首組であり、主屋同様の架構をさすしていることがわかる。馬を飼う場所の方に又首を架けることで構造的により強い小屋組にしている。

倉庫
唐臼
馬小屋

□馬屋平面図 1/100

□大きな梁と又首（上）：面戸から換気や採光ができる、馬屋全景（下）



1階平面：主屋は東西に棟を配し、横に長い平面である。西側から「かまや」「玄関」「待合室兼居間」(6畳)が並び、最も東側には奥の「おもて」(6畳)と前方の「診療室」(4畳)が並んでいる。土間の「かまや」の両側に下屋を突き出した「ナガシ」があり、「かまや」の奥に牧水が歌を詠んだとされる居間(3畳)がある。「おもて」にトコタナがあり、その東側に庭へ通じる「縁側」がある。この縁側で牧水が生れたといわれ、「産屋」にも使われていた。「診療室」の西側に三方向壁で閉じた「薬置場」がある。この「診療室」には庭に接する「縁側」がない。

「待合室兼居間」には仏壇があり、その横の襖を開くと階段があり、昇ると2階の居間に出る。2階へ昇る階段は「玄関」にも設けられており、これを昇ると2階の「居間兼書斎」へ至る。

主屋への入口は3ヶ所ある。最も格式が高いのが「待合室兼居間」に設けられた式台付きの玄関である。医院に訪れる患者や客人はここから出入りしたのであろう。一方、「玄関」への入口は障子と板戸が設けられた引込み戸で簡素であり、夜間に訪ねる患者や家族の出入口と考えられる。そして「かまや」の側面に設けられた開き戸は井戸・高屋・便所へと通じる勝手口である。

2階平面：最も西側には1階の「かまや」の大屋根がかり、東西方向に「居間兼書斎」「居間」(6畳)「ざしき」(8畳)が並んでいる。「ざしき」の北側にはトコとタナを構え、タナには天袋を有している。長押^{ながおし}を周囲にまわし、釘隠しの痕跡がある。「居間」の北側にはタナと1階の「待合室兼居間」へと降りる階段がある。「居間」にも東側と南側の2方向に長押をまわし、「ざしき」と「居間」の境には欄間がある。そのため、2階の「ざしき」は1階の「おもて」よりも格式が高いものであることが分かる。

「ざしき」の東側と南側、それに「居間」の南側には引き違いの連続窓がとられ、そこから坪谷川や周囲の様子を眺めることができる。一方の「居間兼書斎」は壁で囲まれた閉鎖的な空間である。

これら2階の「ざしき」「居間」の天井を棟に近づけているために、両側の合掌^{がっしょうじり} 尻が天井を出て船底天井となっている。それは美々津の町家にも見出すことができる。さらに2階の天井が屋根勾配に沿って曲がっていることから分かるように、2階という空間がまだ完成しておらず、その発達段階にあることが分かる。この未発達天井を設けていることに、この住宅の価値を指摘することができる。